

昨年の12月、穴水町復興計画について、策定委員会の池田委員長から答申いただきました。策定にあたってご協力いただきました皆様にあらためて感謝を申し上げます。

この計画の策定過程で、教育についての復興未来づくり会議を開催し、長野県飯田市の一般社団法人未来地図代表の代田昭久さんに講演をいただきました。その時のお話をご紹介します。

飯田市のシンボルのひとつに、市街地の大通りに連なる「りんご並木」があります。南北約300メートルにわたってりんごの木が植えられており、地域を象徴するシンボルロードとして地域の人たちに親しまれています。この「りんご並木」のルーツは、昭和22年の「飯田大火」までさかのぼります。この火災で市中心部の3分の2が焼け落ち、3500戸が焼失し、被災者1万7800名の大災害となりました。昭和28年に災害からの町づくりとして、当時の中学生たちが発案し、自らりんごの木を47本植樹したのが始まりです。

当時の行政は、街路樹としての管理の難しさや盗難による犯罪増加の懸念から難色を示しましたが、子どもたちの熱意で実現しました。翌々年のりんごの収穫はたったの4個。それでも「りんごが実っていても、それを盗む者がいないような美しい心をもった人が住む街をつくる」という中学生たちの復興への強い思いが、70年以上経った現在まで受け継がれています。今では毎年1万個以上のりんごが収穫され、地元の中学生在が草刈りや剪定作業を地域の人たちや行政と協力をしながら行っているといえます。

りんご繋がりで、「明日、世界が減びる」としても今日君はりんごの木を植える」。今年の仕事始めで、年頭の挨拶の中で職員の方々にご紹介した言葉です。これは作家の開高健氏が好んで色紙に書いた言葉です。元々はヨーロッパの小説の中で、ドイツの宗教改革者マルティン・ルターの言葉として書かれた「たとえば世界の終末が明日であつても、自分は今日りんごの木を植える」が原点であると言われています。この言葉と飯田市の「りんご並木」の話を通して、私は復興へ向けての姿勢を教えられたような気がします。明日のために、来年のために、10年後のために、将来のために、次世代、次々世代にふるさと穴水に住む人のために。